

六 明治・大正時代の黒石

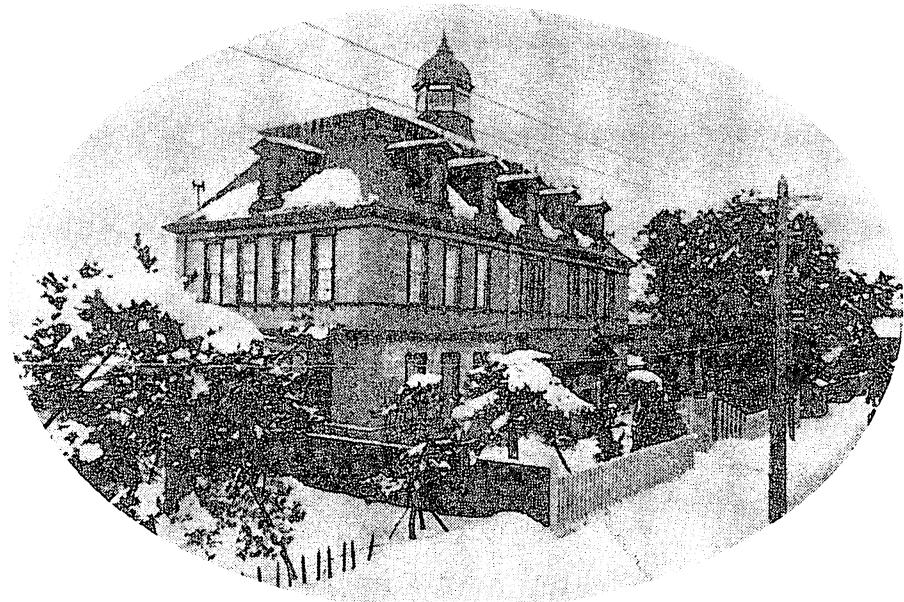
(一) 黒石の町の移り変わり

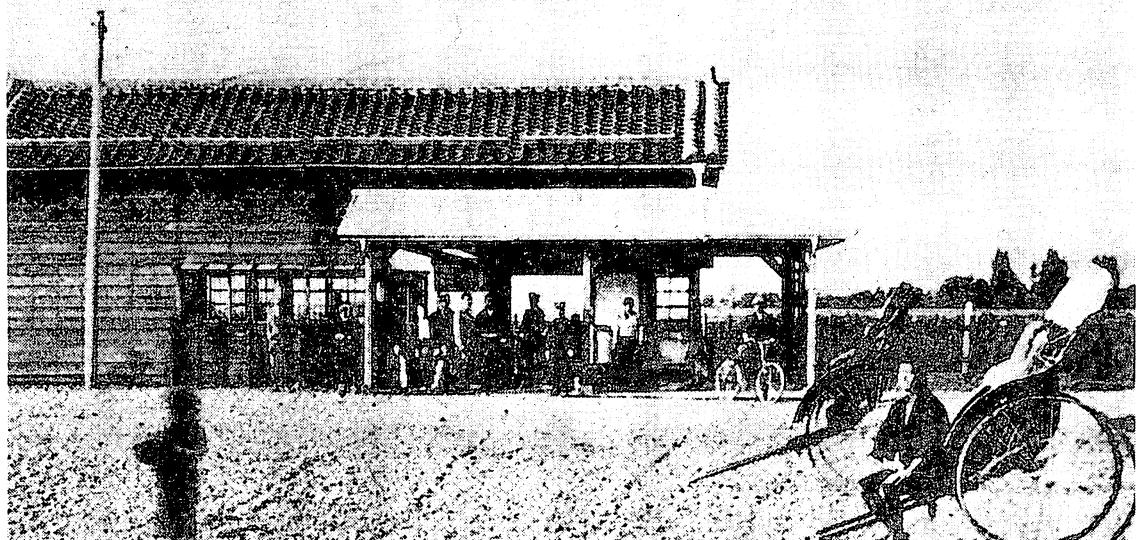
黒石は、江戸時代には、黒石藩⁽¹⁾一万石の大名の城下町でした。藩主は、弘前津軽家の⁽³⁾分家⁽²⁾でした。お城はなかつたのですが、それに代わる⁽⁴⁾陣屋⁽⁵⁾を造つて藩主は住んでいました。今の、御幸公園、市の町、内町、大工町のある場所に、藩主⁽⁶⁾が生活したり政治を行つたりする御殿⁽⁷⁾と、家来たちの住む侍屋敷⁽⁸⁾がありました。

明治四年（一八七一年）に、廢藩置県が行われたとき、藩主の津軽承叙⁽⁹⁾は東京に移りました。黒石町は、黒石県から弘前県と変わり、それから青森県の一部となつて現在のようになつています。

町には県庁出張所⁽¹⁰⁾が置かれました。やがて南津軽郡役所⁽¹¹⁾が開かれ、役所の仕事は郡全体におよびました。陣屋のあたりには、役所や学校が建ち、一部は商店街⁽¹²⁾にもなりました。政治・経済・教育の活動のかなめとなる場にな

南津軽郡役所（大正7年）



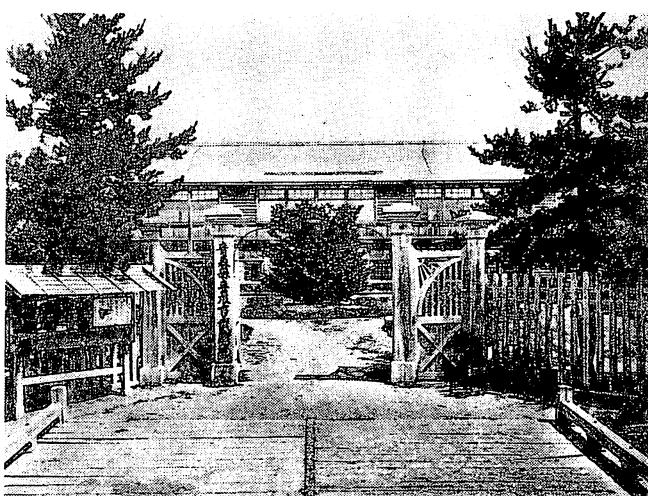


黒石停車場（大正2年）K

りましたから、南津軽の中心地になつていきました。明治の日本は、西洋の国々の文明に追いつくために努力しました。城下町黒石にも、明治のなごろから大正期にかけて、西洋風の建物が目立ちはじめ、男女の服装も変化を見せはじめるなど、⁽⁶⁾文明開化の影響^{えいきょう}が多く見られるようになります。した。

明治四十一年（一九〇八年）には、黒石町に初めて電灯がつき、同四十二年には電話も使えるようになり、とても便利になりました。

川部駅と黒石との間に鉄道ができるのは、大正元年（一九一二年）でし



青森県立農事試験場（大正4年）L

た。乗客や貨物の輸送も便利になつて、黒石駅のあたりにも必要な建物ができるいくなど、しだいに整備されていきました。また、大正二年に、青森の新城にあつた県立農事試験場が、南津軽郡中郷村境松に移つてきました。

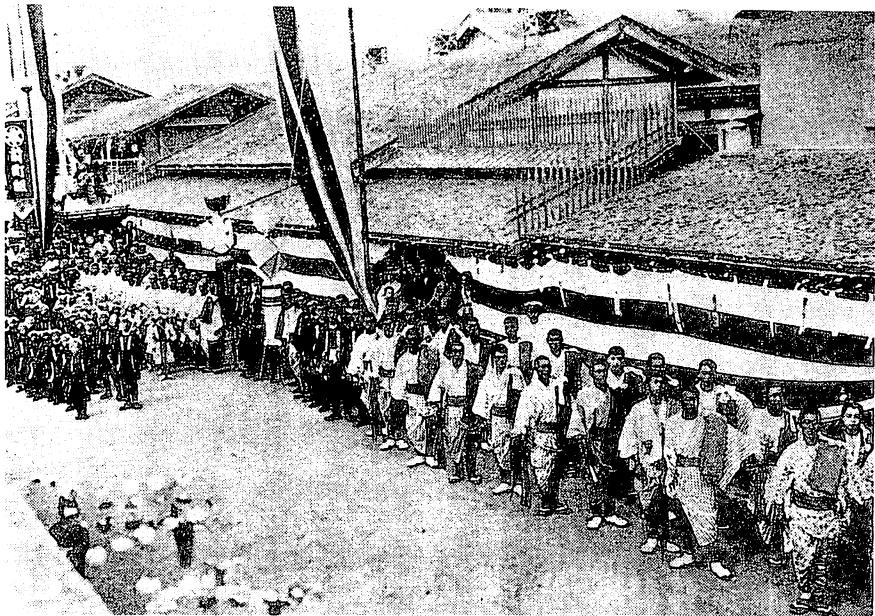
町のまわりにも、そのような建物ができていき、城下町であつた黒石がしだいに新しく広がっていきました。でも、その中で、黒石の古い時代のよき姿も、なかなか消えることはありませんでした。

(二) 武士や町人のくらし

城下町であつた黒石町に住む人々と、農村であつた中郷・浅瀬石・六郷・山形などの四か村に住む人々のくらし方にも違いはありましたが、黒石町に住む武士と町人の生活には、とても大きな変化がありました。

廢藩置県のあと、本家の弘前の城下町は、⁽⁷⁾家禄を返して、与えられた田や土地のある村々に住む藩士たちが多くなりました。数千の藩士たちがいっせいに町を離れましたから、人口もへり、物の売買も少なくなつて活気がなくなりました。

ところが、同じ城下町でも、黒石は藩の時代よりも景気がよくなつたと



前町大通り

(明治44年、繁華街の古いおもかげを残す町なみを通る開町250年祭りを祝う行列)

いうようすが見られました。その理由は、弘前の多数の藩士が、黒石の周辺に住むようになつたこと。黒石藩の人たちは領内がせまいので、町の中から動かなかつたこと。北海道の開発が進められていつたときなので人々の交通が多くなり、黒石は奥羽街道の宿場として大事な場所となつたこと、などがあげられます。

秋田の方から北海道へ行く人は、まず、碇ヶ関いかりがせきか大鰐おおわにで一泊し、次の日、碇ヶ関を出発した人は黒石泊まり、大鰐を出発した人は浪岡泊まり、というように決まっていました。ですから、黒石は、多くの人々が旅をするときを利用して大事な宿場として景気がよかつたわけです。明治の初めには、弘前から黒石に移り住んだ商人もかなりあつたと言われています。

そのころ、黒石町で一番にぎやかだつたのは前町でした。そこには、十数軒の旅籠屋はたごや（宿屋）がありました。秋田雨雀あきたうじやくが書いたものの中に、「旅籠屋の二階の手すりによりかかるて上方弁の旅人が話し合っている風景をよ

く見かけた」とあります。明治二十年代までもそのような町のようすが続いていたことになります。

黒石藩の武士は、明治四年ころは百六十八人ほどで、黒石町にある屋敷は約五十軒でした。廃藩置県とともに家禄を失い、役人や学校の先生や警察官になつたり、農業その他いろいろな仕事を始めたりしました。仕事で成功していった人もあつたと思いますが、多くの人々は始めた仕事がうまくいかなくて、生活していくための収入に困り、家屋敷を手放したりしました。そのあとには、商家や民家が建ちました。内町・市ノ町・横町あたりになります。

城下町であつた黒石町は、武士の身分であつた士族(10)しぞくがしだいに力を失い、代わつて町人が実力をもつようになりました。特に、酒造業(しゅぞうぎょう)・米穀(べいこく)の移出商・肥料商(ひりょうしょう)などをやつている商人が中心になつて、町の政治を動かすようになつていきました。

(三) りんごの栽培(さいばい)をはじめた人々

農村では、米づくりを中心に行なう人々。たゞやす土地が少ない山地では、木材の切り出しや炭焼き(すみや)の仕事にはげむ人々。そして、新しい

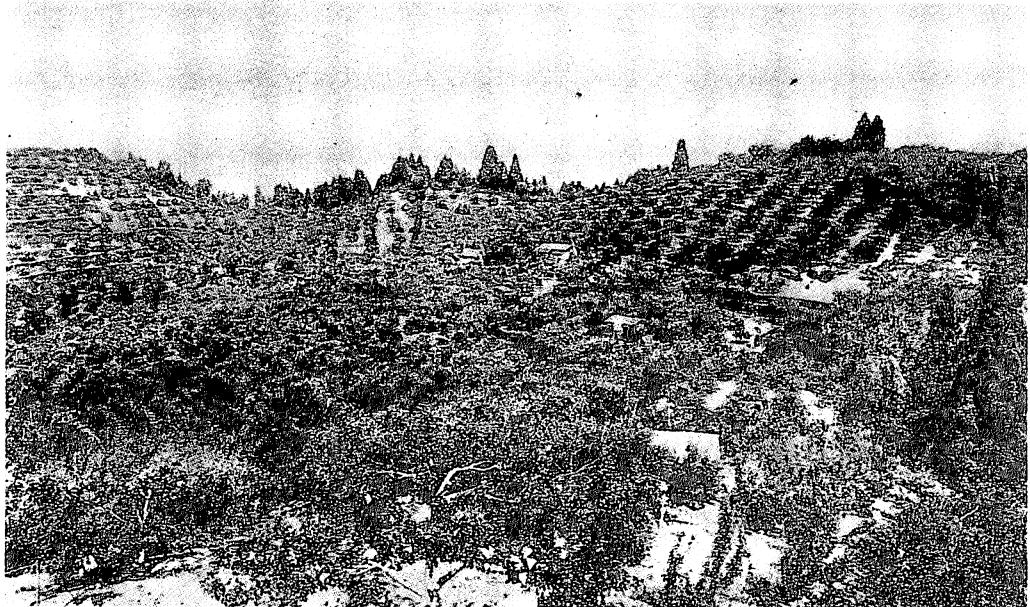
産業であるりんごの栽培にはげむ人々など、熱心にこつこつと働く姿がありました。

黒石に、新しい作物であるりんごの苗木がとどけられたのは、明治九年（一八七六年）でした。明治二十年には、弘前士族の竹内清明、黒石の加藤宇兵衛、福地幸八会社を作りました。山形村福民（現在の県立りんご試験場付近）に十町歩のりんご園を経営し、りんごの栽培や販売を行つて大成功をおさめました。

続いて、六郷村の宇野清左衛門、浅瀬石村の鳴海久兵衛^Q（きゅうべえい）といふ人たちも、大きなりんご園を造つてりんごづくりを行ひ、「黒石りんご」を発展させました。

味の良いりんごを栽培するには、植える土地や品種や手入れの仕方などでも、いろいろ工夫しなければならないことがたくさんありました。

最初は平地に植えられていましたが、明治三十四年に
は、黒石町の西谷彦太郎といふ人が、山形村上野で傾斜^{けいしゃく}



りんご傾斜地栽培園（大正4年、山形村出石田地区）

を利用する栽培を試みました。県内では最初のこととて、りんごの「傾斜地栽培」として広まっていきました。

りんごに害虫がついたりすると、木に登つて「害虫落とし」をするなど、とても大変であったのですが、明治三十七年には、黒石町の奥村喜蔵という人が、りんごに「袋かけ」を実験して成功しました。その工夫は、りんごづくりをめざす津軽地方の人々にもさかんにとり入れられました。

りんごの栽培が進んでいった歩みには、そのように努力した人々の苦労があったのです。それが今日にも生かされ、さらにりんごづくりの工夫が続けられているわけです。

(四) 子どもたちの学校

小学校ができる前、子どもたちの勉強できる場所は「寺子屋」でした。

黒石地方の寺子屋は、^[R]黒森山淨仙寺が最も古いようです。藩政時代、農民で学問を必要とする庄屋の家の子どもたちは、たいてい黒森で勉強したそうです。

明治時代になつた後も、黒森の寺子屋は、黒森学校とも呼ばれ、県内や県外から学びにくる人もいたそうです。大正時代になつてからも、寺子屋

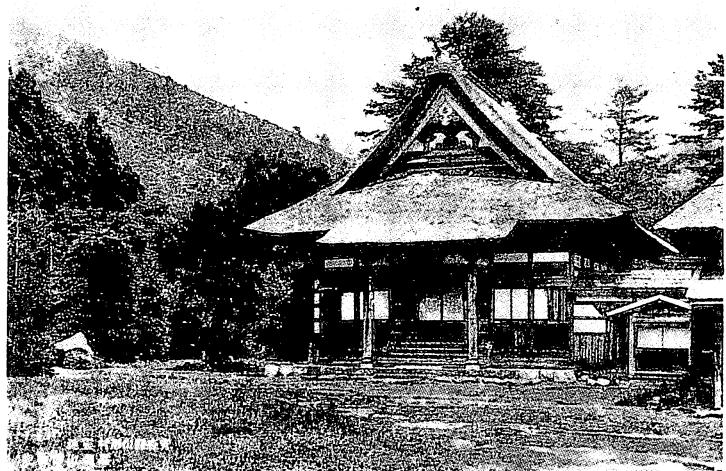
に使つた建物は、地方で中心になつて活動する青年の勉強の場として活用されました。

黒森以外の寺子屋は、みな城下の黒石にありました。

江戸時代の末の黒石には、九つの寺子屋がありました。

そこは、町人の子どもたちを教育した私塾(12)しじゅくでした。明治六年に小学校ができてからでも、二、三の寺子屋は町人の子どもたちの勉強を続けていました。

現在ですと、どの子どもも、年齢が六歳になれば小学校一年生として入学し、六年間の小学校生活を終えて卒業していくというようになつていますが、昔の寺子屋はそうではありませんでした。そこで勉強できる子どもは、収入があつて生活に困らない家庭の子どもが多かつたようです。とくべつ裕福な家庭の子どもは、七、八歳で入門しましたが、たいていは十歳をすぎてから入門するのがふつうでした。寺子屋の大部分は、勉強は朝から午後四時ころまでで、三年間で卒業するしくみになつていました。



黒森山淨仙寺の本堂（大正中期）、宿坊を寺子屋として使い、教育の場でもあった

黒石町に一番早くできた小学校は、黒石小学校でした。明治六年（一一八

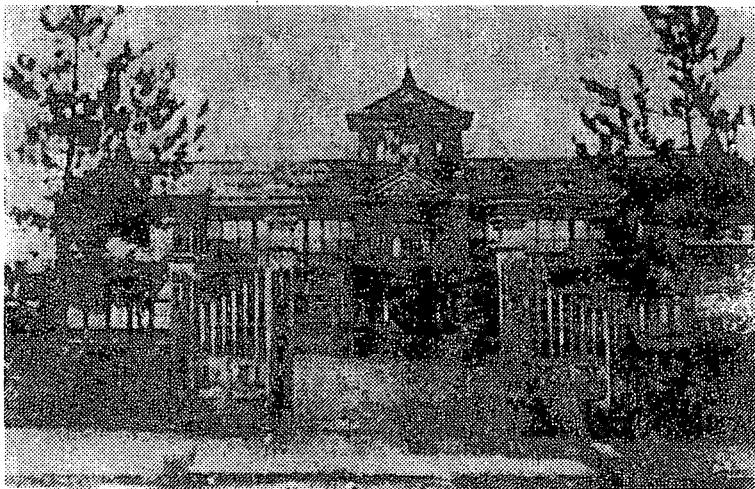
七三年）八月二十八日に、旧陣屋の御殿をそのまま校舎として使用しました。それで、子どもたちは、明治二十年あたりまで黒石小学校を御殿と呼んでいたものでした。

正式には「黒石小学」という名前でした。「黒石小学」に入学した子どもたちは、黒石町だけでなく、野際^{のさわ}・黒石村^{のそえ}・東野添^{ひがしのぞえ}・株梗^{くみ}の木・北田中^{きたたんじゆう}・追子野木^{おさのぎ}・境松^{きょうまつ}・久米^{くめ}・堂ノ前などの十か町村にわたっていました。これらの町村で、黒石小学連合会を作り、学校で必要な費用を分担^{ぶんたん}するしくみになっていました。

すべての国民が学校に入つて勉強すべきだ、という考え方もあり、新政府によつて「学制発布^{がくせいはつぶ}」されたのは、明治五年（一八七二年）でした。それから一年と二十五日目で学校を造つたと言われています。黒石地方の人々の、子どもの教育に対する熱心な気持ちがわかりますね。

続いて、明治七年に浅瀬石小学校、同十一年に牡丹平小学校などをはじめ、まわりの村々でも、村立小学校を次々と建てていきました。

御殿のあとに建った黒石小学校





温湯温泉の客舎と共同浴場（明治40年）

(五)

湯治客でにぎわった黒石温泉郷

黒石地方は、西は穀物が豊かに実る平野の部分と、東は自然の幸が豊富な山地の部分とにもわけられます。

う山々のあいだを、水清
き浅瀬石川が流れていま
す。その流れのほとりに、
温湯。板留。落合。二庄内。
沖浦などの温泉場があり
おきうら

ました。現在の「浅瀬石

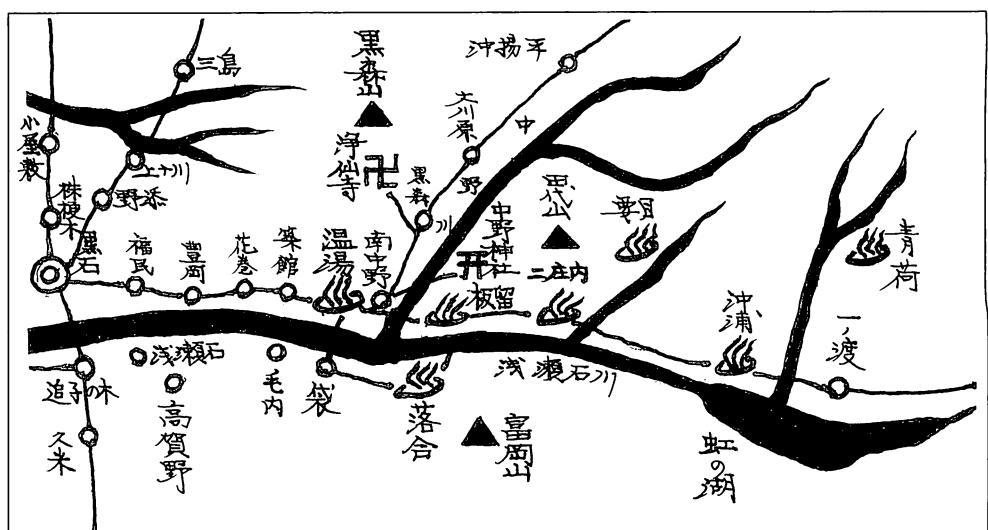
川ダム」をつくるとき、

二庄内・沖浦などの温泉

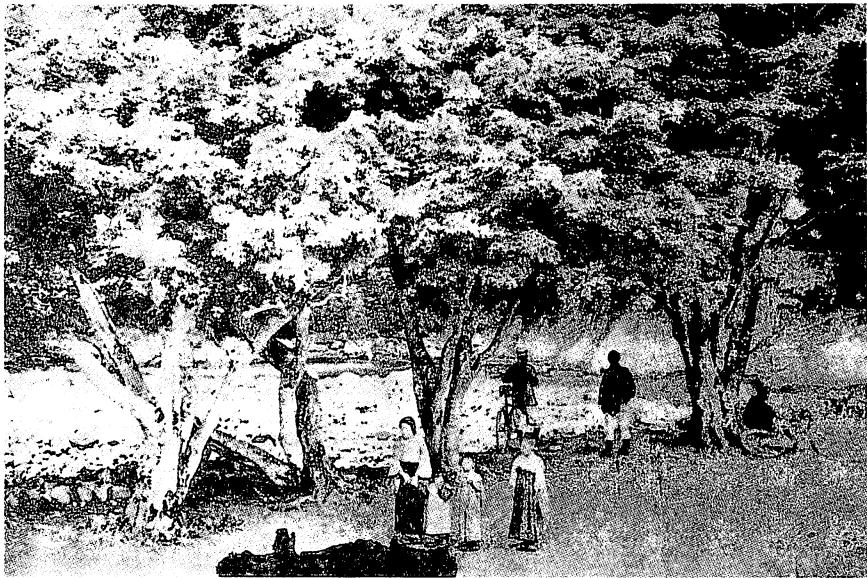
は水底に沈んでしまいま

した。昭和二十九年以前

は、それらを含めて南津軽郡山形村の中にありましたから、「山形温泉郷」と呼ばれていました。



山形温泉郷略図



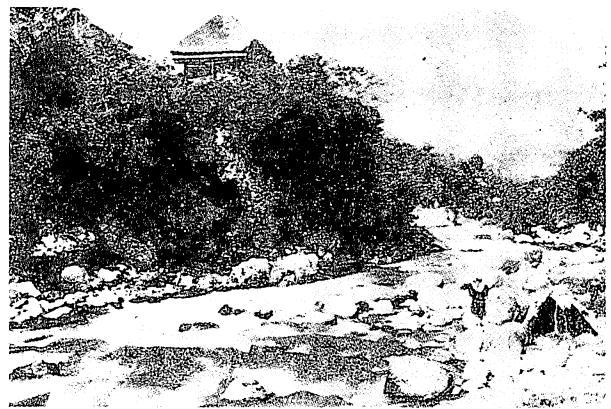
「もみじ」を見て遊ぶ人たち（大正末期）

その歴史は古く、温湯。板留はすでに江戸時代から湯治場として知られていきました。温湯も板留も、道路に面して客舎がならんでいました。そのころは、自動車もはげしく通りませんから、^⑭湯治客は手ぬぐいを下げて、のんびり戸外の浴場に通いました。そして、近くの二庄内や沖浦に出かけたりしました。とちゅうの道ばたの小さな沢の石をおこすと、カニがはい出します。湯治客たちはそれをとつてきたり、秋には中野神社や淨仙寺にお参りし、すばらしい紅葉をながめたり、^S近くでキノコや山ブドウやアケビをとつたりして、楽しくすごしました。

雪消水 岸に溢れてすえ霞む
浅瀬石川の鱈とりの群

これは、若山牧水が大正五年（一九一六年）に、板留で旅館を経営していた歌人の丹羽洋岳をたずねて来て、温泉に入りながらゆっくり泊まつて

いたときに作つた歌です。牧水は旅を愛して全国をめぐり歩いた有名な歌人です。



板留温泉ふきんの浅瀬石川の流れ（大正4年）

そのころは、浅瀬石川にのぼつてくるマスを、板留ふきんでもたくさん見ることができました。板留がわと落合がわの川の両岸にわたつて、堰堤^{(16)えんてい}がありました。そこは、川の水が堰堤を乗りこえて流れ落ち、数メートルの真っ白な滝になつていました。その滝をこえるためのマスの勇ましい飛び上りは、湯治客の目を楽しませました。泳いでくるマスをめがけて網を投げ、引き寄せた網の中で動くマスは銀色の光。という川岸のようすも、目に残る風景でした。

また、とれたばかりのマスを串に刺して、温泉宿の圍炉裏^{(17)いろり}で焼き、湯上の^{(18)さかな}がりの酒の肴にするうまさは、特別であつたそうです。そこは、ヤマメ、イワナ、ハヤ、カジカなどもたくさん釣れました。ヤツメウナギもとれました。山形温泉郷の自然豊かなようすが浮かんでくるようですね。

そのような山形温泉郷も、時代が進むにつれてしだいに変わつていき、黒石市になつてから、「西十和田温泉郷・黒石温泉郷」と呼ばれるようになりました。

①藩・領内——江戸時代、大名がおさめている土地。その土地のことを所領ともいう。その土地の中が領内。

②大名——江戸時代、一万石いじょうの土地をもつてゐる武士。

③分家——家族のうち、だれかが別れ、べつに一家をつくることや、その家のこと。

④陣屋——江戸時代、城をもつてゐない大名や、ある土地をおさめる代官などが、その土地にたてた屋敷・役所。

⑤南津軽郡——津軽藩の全体の土地を、およそ東西南北にわけ、南の方を南津軽郡とよんだ。現在の、黒石市・平賀町・大鰐町・碇ヶ関村・浪岡町・常盤村・藤崎町・田舎館村・尾上町などがある。

⑥文明開化——人の知識も深まり、世の中が開けて生活が便利になること。とくに明治の初め、日本が西洋の文明を進んでとり入れ、古いやりかたをやめて新しくし、ヨーロッパやアメリカの国々の状況に近づいていったようす。

⑦家禄——禄は、むかし、政府につかえる者に与えられる給与、あるいは与えられた物を禄といつていた。江戸時代、幕府・大名・領主などの家臣の家に与えられている禄高のこと。

⑧藩士——大名の家来である武士で、大名の家臣ともいわれた。大名は藩主。

⑨奥羽街道——奥羽は今の東北地方にあたる。江戸から津軽藩の油川(青森)・三厩(東津軽郡)へ通じている道路。

⑩士族——明治のはじめのころ、武士であつた家がらに与えられたよび名。

⑪経営——事業(しごと)を計画し、じつさいに行つていくこと。

⑫私塾——町や村でなく、ある人が経営している塾。師匠(ししょう)先生が、子どもたちに勉強させるところ。

⑬学制發布——学校教育についてのきまりを、世の中に広く知らせること。江戸時代は、寺子屋で勉強できる子どももいたが、まったく勉強する場がない子どもも多かった。明治政府は、大学・中学・小学校・高等学校および、師範学校(しはん学校)先生になるために学べる学校)を建てることについてのきまりを、明治五年(一八七二年)に発表し、全国の子どもたちが学校で学べることをめざした。特に、小学校の教育に力を入れた。

⑭客舎——旅館(りょかん)。やどや。

⑮湯治客——温泉に入つて、つかれや病(やまい)をなおりたりするお客様。

⑯堰堤——川の水流、あるいは土や砂をせきとめるためにつくられた堤(つつみ)。

七 昭和時代の黒石

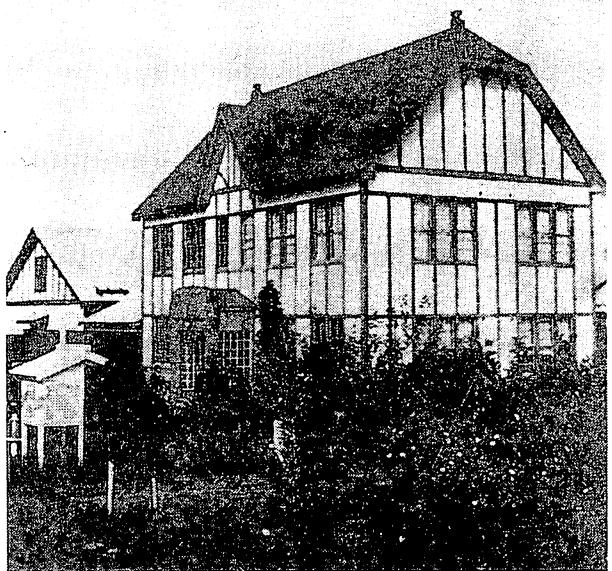
(一) 昭和はじめの町なみ



前町大通り（昭和7年）

昭和に入つても、黒石の町の広さは、ほぼ変わりありませんでした。ただ黒石駅ができたために、駅前から株梗くわきの木あたりに家がびっしり建つていきました。また、山形町通りが東に伸びだし、りんご園だつた後大工町にも家が建つていきました。市ノ町・前町・中町・上町・油横丁などの町の中心になる大きな通りには、洋風づくりの銀行・薬局・医院などの建物が多くなりました。それが、前から建つてある酒造店しゅぞうてんや呉服店ごふくてんなどの落ち着いた感じの建物といつしょになり、町がいつそう活気づきました。

大正十五年に、黒石町役場Jは南津軽郡役所のあとに入り、昭和四十四年ころまで使用されました。このころになると、多くの人々が洋服を着るようになりました。自転車やオートバイが町を走って、交通安全運動も行われました。



県立苹果試験場の全景と試験園（昭和6年）

また、昭和六年（一九三一年）に、山形村福民に県立苹果試験場が建てられ、モダンな建物として黒石の新しい名所になりました。現在のりんご試験場です。県立農業試験場と県立りんご試験場が、この黒石にあるということは、田園観光都市、「米とりんご」の黒石にとつても、力強い応援であつたと思います。

（二） 苦しかつた戦争時代

昭和十二年（一九三七年）には、日華事変^①が起こりました。

黒石町や近くの村々^②から、軍人として戦地に行く人が多くなり、壮行会や戦死した人の町村葬^③もしきりに行われました。戦争が長びき、それが広がつて、昭和十六年十二月ごろから、日本が多くの国々を相手に戦つた太平洋戦争となり、昭和二十年八月十五日、敗戦に終わりました。

戦争中は、戦争のために使う物資がたくさん必要になります。それを作るためにたくさんの人手と材料を使いました。そして、戦争が長びくにつれて、どの物資も不足になつてきました。生活に必要な物も、しだいに出回らなくなつていきました。たとえば、ゴム靴^④。地下足袋^{ちかたび}。タバコ。木炭^{もくたん}。

ガソリン。米。塩などです。品不足のため、切符きっぷを持つていって手に入れたり、配給はいきゅうを受けたりするしくみができました。また、自動車の燃料ねんりょうも、木炭のガスをガソリンの代わりに使うなど、代用品を使う工夫も行われました。

日々の食料も不足がちでしたから、ご飯にいろいろなものをまぜて食べたりしました。また、川原や空き地や運動場に、イモ。カボチャ。ひえ。豆などを植えて、食物の生産をふやすように努めました。記録から例をあげると、

。浅瀬石村上山六万平を開墾かいこんした。（昭和十七年七月）

。中郷村西馬場尻ばばしり—午前四時の太鼓たいこの合図で、藁工品わらの増産ぞうさんに励む。

（昭和十八年三月三日付「東奥日報」）

。浅瀬石村でも太鼓を合図に、田植えを共同で行つた。（同年六月九日付

「東奥日報」）

。追子野木村では、浅瀬石川原に、ひえ畠五反歩ひらを拓いた。（同年六月二

十二日付「東奥日報」）

などが見られます。

また、黒石は、大都市に住む子どもたちの避難する場所にもなりました。

昭和二十年五月に、⁽⁵⁾空襲などを避けるため、保福寺・妙経寺・来迎寺。
感隨寺に、東京の方から約二百人の子どもたちが来てくらしました。

昭和二十年七月二十八日に、青森市が空襲され、なくなつた人が約七百三十人・焼けた家が一万四千九百六十四戸ほど・被害を受けた人が約七万人以上、といふ悲惨な状況でしたが、黒石は空襲がありませんでしたから、住んでいる人たちも、建物も、東京の子どもたちも無事でした。

昭和二十年六月には、沖浦ダムが完成し、そこの水力発電所の機械も調子よく動きだした、といふ明るいニュースもありました。

(三) 黒石の文芸

◆ 秋田雨雀と子どもたち

みつばちの 巣ばこにわれは 耳あてて

はるかにもさく 春のおとずれ

〔V〕



御幸公園詩碑 Ⅴ

秋田雨雀先生の作った詩（短歌）が、御幸公園の詩碑にきざまれています。この詩碑は昭和二十八年（一九五三年）に建てられました。その次の年、雨雀先生が黒石に来ました。そして、きざまれてある詩について、お話をしました。

「私は、郷里——黒石を、いつも、夢のように美しく心にえがいていたものです。ところが、その郷里の子どもによつて、夢が無残にもやぶられました。『戦争の苦しみ』『貧乏』『家庭のいさかい』などのみにくいものが、純情な子どもによつて見せつけられたのです……。黒石子どもの綴方集『みつばちの子』を見たとき、私は正直なところ、大きな棒で頭をなぐられたような気がしました。

新城に疎開してきたとき、砂糖がなくて困ったので、淡谷悠藏さんがミツバチの巣箱からとりました。私は巣箱に耳をつけてじつと聞くと、ミツバチが中でガサガサしていますが、いかにも空腹らしく思われました。しかしながら、近づく春を待つて生きぬこうとする強い生命力を感じることができました。

その後、黒石から『みつばちの子』が、謄写版づくりで、何回かにわけて

おくれたので、巣箱に耳をつけたときの気持ちが、この詩になつたのです。

ですから、原作は『かすかにもきく春のおとずれ』だつたのです。公園の詩碑には、『はるかにもきく』ときどまれていますが、『はる』が二つ重なつて、これまでの作詩のしかたとしては、しりぞけられるべきものですが、『春をひきだす』意味ですから詩碑の方を正しいものとします。』

黒石の子どもたちの書いた作文を読んで、とても感動し、自分の願いをこめて詩（短歌）を作つたという心情がよくわかることがあります。

だれもが、どの子も自分の良いところを伸ばし、自分で生きていく力、平和を築いていく力を養つてほしい、と願っています。雨雀先生も、黒石の風土に育まれている子どもたちに、そのような思いを抱いたのではないでしようか。黒石の子どもたちの書いた文章には、それを感じさせるほどの真実が表現されていたからだと思います。

「みつばちの子」は、鈴木喜代春先生が黒石小学校にいたとき、子どもたちの書いた作文をのせて作った「学級文集」でした。「自分の考えや行動を、自信をもつて行える子に育てたい」と願い、子どもの心としつかりむすびつく作文活動をしたのだと思います。そのころの黒石の子どもたち

も、自分の生活をすなおに見つめ、事実やそれについての思いを表現していく、という、自分自身を育てていくうえで、とても大事な勉強をしていました。

◆ 文芸が育った黒石の環境

昔、黒石の人は、何につけても、新しいものをとり入れるに早い、と言われていたそうです。これは、黒石が古くから中央と行き来する機会が多くつたのと、黒石が経済的にわりあい裕福であったことや、小さな藩であつたから、常に新しいものを創造していく工夫が必要であつたということが、大きく影響していると思います。

ただ、小さな藩が生きるためには、何かを工夫して、経済的にはさらに豊かになつていく方法を考え、文化の面でもよそから認められるものを育てていく、ということを求めたのではないでしようか。

第八代領主（初代藩主）津輕親足^{つがるちかたり}は、江戸で和歌を学び、さらに、京都の非常に立派な歌人のところに入門し、人々が感心するほどすぐれた歌をつくりましたから、江戸や京都でも名前が知られていました。天皇のお使いとして京都から江戸に来た身分の高い歌人たちと、歌を贈^{おく}つたり贈ら

れたりという交わりもなされたそうです。親足は、江戸から黒石に帰ると、黒石弁で歌を作ったりしました。



蝋山の芭蕉の句碑

田さ出はて さしこの裾すそをだらめがし

苗こなげつけ 祝うめらはど

田んぼに出た農民の娘たち（めらはど）が、喜び合いながらお祝いに苗を投げつけている姿、着ている「さしこ」のすそのゆれ動くようすなど、

娘たちの楽しげな声やそのときの場面が浮かんでくるような感じがします。

そして、この歌から、親足の百姓に対する愛情も感じ取れるような思いがわいてきます。

親足は、藩内にも歌学所を造つてすすめたので、和歌がさかんになりました。そのことは、領民が和歌や俳句を作るようになつていった一つの原因であると見られています。黒石の文学発展の基礎づくりになつたのではないでしょうか。

温湯。板留。中野には、ゆっくり楽しめる土地として文学者などが訪れることが多く、歌や句が作られたり、歌碑や句碑が建てられたりしました。

松尾芭蕉の句碑の多いことも黒石の特色です。県内二十六基のうち、八基が黒石に建てられています。このうち、安永二年（一七七三年）に、黒石や温湯の俳人が建てた温湯蠶山の芭蕉塚は、黒石周辺では最も古い句碑と言われています。それには、芭蕉が元禄七年（一六九四年）に作った、

梅が香に のつと日の出る 山路かな

〔W〕

という句がきざまれ、山路塚とも呼ばれています。これが建つてから、そこを訪れる俳人も多くなり、遠くの秋田県から来た人もあつたそうです。このように、黒石は昔から文芸の心が育つていく、格別な味わいのある土地であつたと思っています。

明治の後からも、秋田雨雀。鳴海要吉。丹羽洋岳をはじめとして、多くのすぐれた文学者が生まれました。黒森山淨仙寺境内には、文芸の道で活躍した人々の歌碑や句碑が建てられ、「文学の森」^Rが造られています。また、中野神社境内に俳句と川柳の碑が多いのも特色の一つだと思います。

〔S〕

①日華事変——日本と中国の戦争

②壮行会——出かける人をはげます会

③町村葬——町や村が中心になつて、亡(な)くなつた人のお葬式(そうしき)を行うこと。

④太平洋戦争——昭和十一年(一九四二年)ころから、昭和二十年まで、日本とアメリカ・イギリス・中

国・フランス。その他、の国々との間に行われた太平洋地域での戦争。第二次世界大戦にふくまれる。

⑤空襲——空(飛行機)から、爆弾(ばくだん)や機関銃(きかんじゅう)などで、おそうこと。

⑥詩碑——詩や文章を、表にきざみつけた石のこと。

⑦疎開——空襲や火事などの被害(ひがい)を少なくするため、都市などに集中している、たくさんの人々や建物を分けて散らすこと。

⑧和歌——漢詩(かんし)——中国の古い時代の詩——にたいして、日本の歌という意味。「五七調」の言葉の音をもとに作つた詩。時がたつにつれて、「短歌」(五七五七の五句)と同じ意味をもつようになった。俳句は、五七五の十七文字音。川柳も十七文字音をもとに内容を表現している。

いすれも、日本独特(どくとく)の短い詩で、短詩型文学(たんしけいぶんがく)とされている。

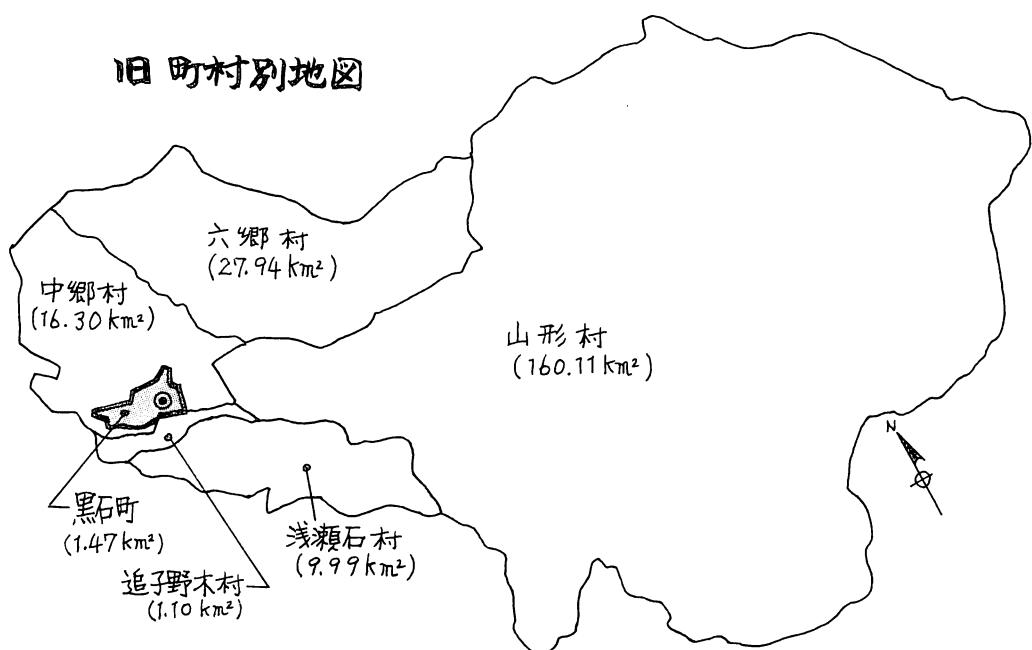
⑨さしこ——厚い木綿の布をかさね合わせて、いちめんに細かく刺しぬいをしたもの。じょうぶなので柔道や剣道のけいこ着などにも使われた。

⑩松尾芭蕉(まつおばしょう)——江戸時代の有名な俳人(俳句をつくる人)。数年にわたつて土地を歩きめぐり、深く味わいのある俳句をつくつた。尊敬されて、教えを受ける人々が多くつた。

八 黒石市の誕生

(一) 中郷村に囲まれていた黒石町

黒石町では、中郷村と合併したいという話が、明治の時代から起ってきました。それは、黒石町はほんの一部を除いて、ほとんど全部中郷村に囲まっていたからです。



旧町村別地図（第6回黒石市の統計より）

百姓町（黒石）、境松、新町、片裏町は黒石ととなり合わせて、町内と同じ生活をしていました。町長福士永一郎氏の家は元町ですが、母屋おもやが黒石町、うら庭が中郷村であったそうです。従つて合併しないのが不思議なくらいでした。中郷村には合併にすぐ賛成できない事情があつたようで、この話は簡単には決ま

らないまま、長い年月が流れました。

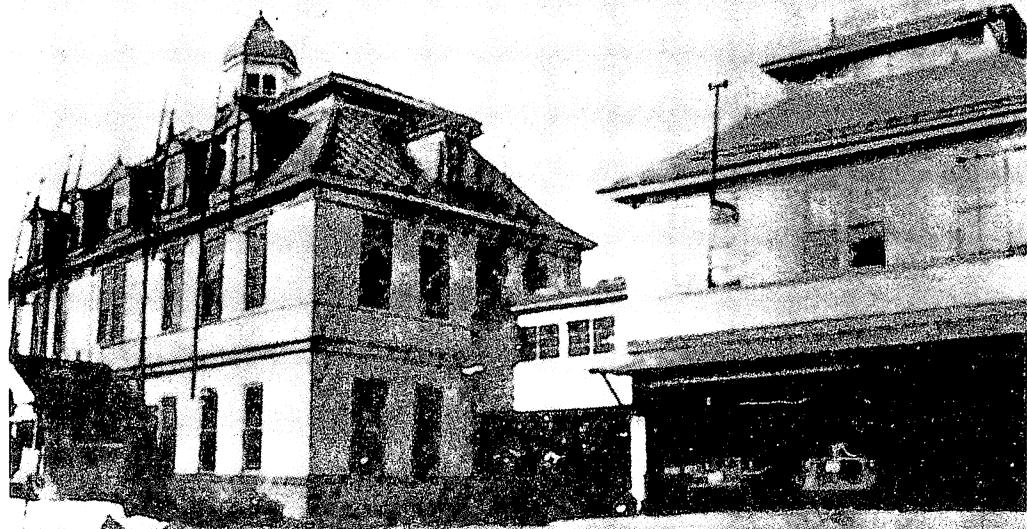
その後、昭和二十四年（一九四九年）中郷村の袋井が黒石町に合併しましたが、当時青森県では、黒石町、中郷村、六郷村、山形村、浅瀬石村、光田寺村の六か町村の合併を強くすすめました。そこで代表が何回も集まって相談した結果、市の名前を「黒石市」「津輕市」「陸奥市」から選んで合併することになりました。光田寺村は、田舎館村といっしょになつたのですれました。

（二）黒石市の誕生

昭和二十九年（一九五四年）七月一日、黒

石町は、まわりの中郷村、山形村、浅瀬石村、六郷村の四つの村と正式に合併して、青森。

弘前・八戸に続いて県下で四番目の市として



南津軽郡役所と黒石町役場
(昭和30年代、黒石市役所時代の旧郡役所(左)と、消防署になった旧町役場庁舎)



現在の市役所庁舎
昭和44年（1969）10月9日落成

誕生しました。七月二十八日には、第一回黒石市長選挙が行われ、初代市長には前の町長福士永一郎氏が当選しました。

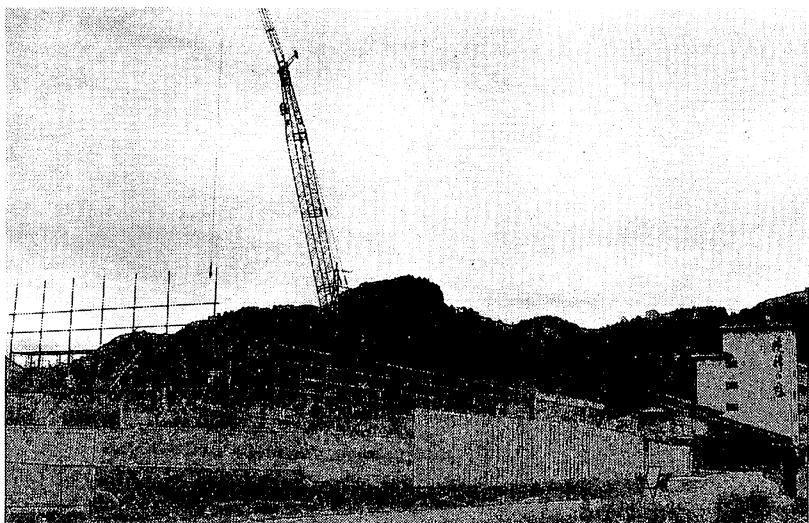
その後、昭和三十一年（一九五六年）には、尾上町の追子野木、久米、長崎も合併しました。

このようにして黒石町は、「黒石市」となって、人口も面積もぐんとふえ、今まで以上に南津軽郡の政治、経済、文化の中心地として発展することになりました。

合併当時の「新市建設の基本方針」の中に、黒石市の未来の目標が次のように掲げられています。

国立公園十和田湖を結ぶ観光施設の充実に意を用い、田園観光都市として飛躍發展を期する。

十和田湖に行く途中にある黒石市に、黒石温泉郷を中心には足を止めて見てもらえるものをたくさん造って楽しんでもらい、「黒石はとてもいいところなのでまた来たい」となつていくようにしていきたいというわけです。この目標は四十四年たつ



伝承工芸館工事現場（落合）

た現在でも生きていて、計画に従って次々と実現されています。

昭和五十四年（一九七九年）東北自動車道の青森市まで開通などの道路の整備、浅瀬石川ダム、虹ノ湖公園、津軽こけし館、城ヶ倉大橋、道の駅、こみせ、市民文化会館、スポーツルイ・X・ルイン黒石など、数々の施設が造されました。

現在は「健康と保養」を目的としたアクアリゾートパークの建築工事が落合で進んでいます。この中には、伝承工芸館、^Xクリハハウス（温泉保養館）、大型露天風呂、イベント広場やロッジ・バー・ベギューハウスなどのある森林公園を造る計画もあります。こうして見えてくると、これからの中石市は一大観光都市になりそうだし、文化、スポーツ、経済の盛んな都市となりそうです。

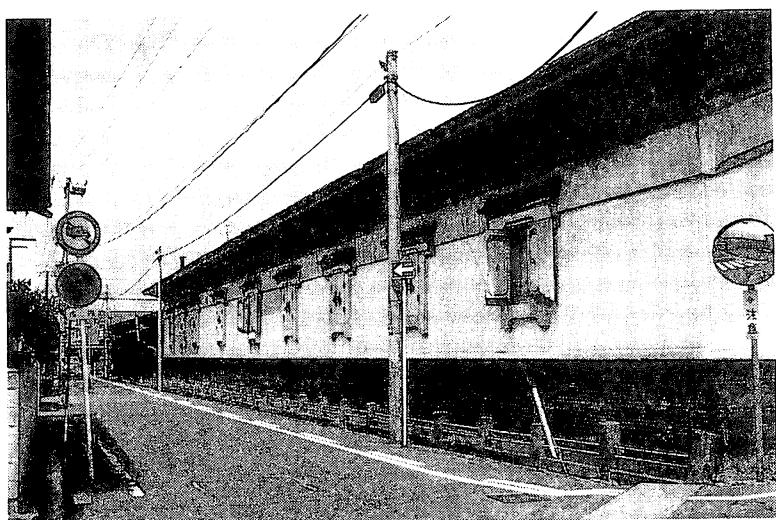
（「八 黒石市の誕生」の執筆者 白戸順一郎）

九町名が語るもの

(一) 市内の町なみや風景から

黒石市の商店街・温泉街・こみせ・横丁・お宮・お寺・りんご畠・山や川や橋や煙突・畦道・住宅街などで、あなたはどの町なみや通りの風景が好きでしょうか。黒石探しの参考までに、古い町なみ・商店街・大型店などがある地区・温泉街・住宅街・農村地帯の六地区を歩いて感じたことを紹介しましょう。

「こみせ通り」にある昔から酒を造つて
いる酒蔵の真下に立つて白壁を見上げたら、
その迫力に目まいがしました。白壁の浅黒
くなつた色彩にも時代を感じ、目を細める
とその頃の風景が壁にぼんやり映つたよう
に見えました。また、この当たりの町なみ
を通ると、昔の人々が音もなく行き交うよ
うな錯覚にとらわれました。



酒蔵のある町なみ N

いろいろな品物を売っている商店街は、各店とも今風の工夫がされており、現代感覚でお客を待つていました。でも、古いよいものを捨て去った訳ではなく、伝統ある黒石商人魂を随所に配置しており、新旧のよさを生かした商売法には感心しました。売上では大型店に圧倒されますが、大型店はない味わいがあり心の奥がじわじわ和むのを感じました。^{なごむ}古臭い、不便だと決めつけないで、のんびり歴史の足跡^{あしあと}をたどりながらのショッピングもいいと思います。

弘前・黒石間のバイパス、黒石・平賀間のバイパスの完成に伴い、大型店がこの道路沿いにどんどんできましたし、市の中心にあった店も多く引っ越してきました。こうして郊外ショッピング圏ができ、賑わっているようです。

黒石が誇る温泉郷の温泉・板留・落合・大川原・長寿・青荷など、浅瀬石川沿い山峡^{さんきょう}の温泉場は、情緒^{じょう}の豊かさで人々の心身を癒し、人々の生活に潤いを与えてくれます。温泉街を通ると、温泉から出ている匂いがほのぼのとした気分にしてくれます。

水田を町なみに変えた住宅街には、目を見はりました。どの住宅街も迷うくらい複雑^{ふくざつ}に町なみが続いており、どの家も二十九三十年前の家に比べると、大きいばかりではなく、見栄えよし建築材料よしの高級住宅街になつ

ていました。

一方、農村地帯は家の造りや道路が変わったけれど、昔ながらの「兔追いしかの山、こぶな釣りしかの川」と唄われそうな風景が、あちこちに見られます。南八甲田横岳のふもと標高七五〇メートルの沖揚平。毛無山を望む厚目内でも高原野菜が作られていますから、自然の豊かな農村美はどこにも負けないと思います。

以上六つの地区を歩いて感じたことを紹介しましたが、皆さんもスケッチブックやカメラなどを持って、自分だけの黒石探しをしてみませんか。

(二) 町名・地名の由来

(その一) 現在の町名と市になる前の区分

黒石の町を大別すると、(一) 横町。前町。元町。大板町などのように「町をまち」と読むもの、寺小路。油横丁。御廟などのように「町のつかない」もの、(二) 松葉町。弥生町。錦町。春日町などのように「町をちよう」と読むもの、(三) 竹鼻。花巻。高賀野。小屋敷。久米などのように「町のつかない」もの、(四) 西ヶ丘。緑ヶ丘。末広。角田などのように「町のつかない」ものなどがあります。その内(一)は旧黒石町であり

(二)と(四)は新しい町であり(三)はそれぞれ旧六郷村・山形村・浅瀬石村・中郷村・尾上町に属していました。

(その二)昔からある名前で、歴史解明の手掛かりになる町名

『町名・地名の由来についていろいろな説がありますが、みなさんに一番親しみやすいのではないかと思われます。』

◆ われる説を取り上げました。』

昔の伝統やくらしがわかる町名地名
これは、同じ商品を売る店、同じ職人・作業場などが集つて出来たと思われる町や地名です。鍛治屋が多い鍛治町・大工が多い大工町・仲買人の多い中町、市が開かれる市ノ町、寺院が集まる寺町(今は京町)、浜(青森方面)に通じる浜町、安孫子徳兵衛が開いた徳兵衛町、集落を見下ろすところに位置し城や砦の役目を果たす石名坂の館などがあります。



山形町大通り(昭和7年)



◆ 土地の状態。使われ方がわかる町名地名

これは、昔こんな使われ方をした土地。こんな状態であつたらしいと
いうことからついた町や地名です。山の方にあり山形村に通じる山形町、
馬場で馬を乗り止める馬場尾(ばばしり)、柵(さき)。川などに囲まれてある柵ノ木。角田、
グミの木。オツコの木からの株梗(くみ)の木と追子野木、よく似た石が二個あ
る二双子、境界と定める松があつた境松、大川原と淺瀬石川原の中間の
中野などがあります。



◆ 川。地形。温泉の様子がわかる町名地名

これは、川や地形や温泉と関連してついたと思われる町や地名です。
浅い瀬で川底の石が見える浅瀬石、大きな川原がある大川原、袋のよう
に出入り口が一つの袋、牡丹の花のような円形状の台地の牡丹平、温泉
を板で囲い留めた板留、ぬるい温泉。温かい温泉（鶴の温泉）からの温
湯などがあります。

（「九 町名が語るもの」の執筆者 工藤 慎）

十たずね歩いてみよう



さあ、さがしてみたまえ。

きみ
あっけられぬかなあ、君に。

1 学校は、どこどこかね。

*19校です。あっけられたら、10点あげよ。

2 黒森山は、どこかね。

地図であっけは5点、外に出て「あの山です。」と言いたら10点だ。

3 浅瀬頬石川は、どこを流れているかな。

川上のダムから、川下の弘南電鉄の鉄橋までたら10点。

4 君の住んでいる場所は、地図でどのへんかな。

「ニニです。」と言いたら10点。——かんたんすぎたね。次は、むずかしい。

5 「津軽こけし館」「城ヶ倉大橋」「スポーツ黒石」は、どこかね。

地図であっけは10点。この三か所へ行ってみた人は、30点あげよ。

6 「りんご試験場」は、どこ。見学会に行ってみたことあるかな。

見学会に行って、畠や展示品を見たことのある人に、20点あげよ。

7 5,000年も昔、縄文人がくらしていた遺跡が見つかったのは、どこ。

花巻と長坂が駆けめぐらしたら10点。ほかの場所もあるんだ。

8 国鉄黒石駅(33ページ写真黒石停車場)は、さてどこかね。

今は、ない。実際にその場所へ行って「このあたりです。」と言いたら50点。

*厚内小中学校は、1校。沖揚平分校は1998年から休校。



さあ、休みの土日(じにち)にでも、
たのんじてみないかい。
お父さんがあ母さんを、
ありやりさない出してさ。

たずね歩いてみよう
黒石城跡(くろいしじゆき)

⑨ 黒石市のシンボルマーク55(42ページ)を、さがして歩こうよ。

五つ以上見つけたら合格。20点あげようか。

⑩ 御幸公園の黒石城跡の石碑は知っているよね。——それでは、
古い黒石城跡(18・23ページ)は、どん。境松まで行って確かめたら、30点。

⑪ 秋田雨雀の詩碑(しひ)が御幸公園(ごこうこう)にあります。——見つけたら、
その詩(48ページ)を、大声で読んで人にだけ、20点。

⑫ 「大手門跡」「無常門跡」「御制札所跡」「太鼓楼跡」この
四つを、さがそう。(22ページ)——見つけたら、40点あげよう。

⑬ 屋根や塀(へ)をつきぬけて、木が
大きく伸びている。中町の松の湯、
みちのく銀行の裏。見たら20点。

⑭ 御幸公園の高台に立ってみたまえ。
松がそびえ、遠くの村や水田、
浅瀬石川の流れが見える。
三百ほど昔の江戸時代に、
この高台に立った人が、何を見て
何を思ったか、想像してくれないかね。

それも友だちに話した人には50点あげよう。
(13~15, 21~23ページ)この本も、すすめてくれよ。

どうだた。
楽し黒石探し

200点は、どれだらうね。
200点以上の人には全員
『おはしたの黒石大学・学生』として
入学を認めます!

ええ、満点がいるってかい。
おみごとです。
330点満点の人は、
大学卒業を認め、
学位を授与します。

(「十 たずね歩いてみよう」の執筆者 高木了司)

「黒石のむかし」を書くときに、参考にした本や資料

- 一 黒石市の市章
 - ・黒石市の市章と東公園の由来 鳴海 静蔵著（平成五年四月発刊）
- 二 花巻・長坂の縄文遺跡
 - ・花巻遺跡 鈴木 徹著（津軽新報平成七年一月からの連載記事）
 - ・長坂一遺跡発掘調査報告書 黒石市教育委員会文化課編（昭和六十年発刊）
 - ・黒石市の遺跡（2）昭和五十九年度分布調査報告書 黒石市教育委員会文化課編（昭和六十年二月発刊）
 - ・黒石市の文化財 黒石市教育委員会文化課編（平成十年三月発刊）
- 三 藩祖 津軽信英
 - ・黒石地方誌 佐藤耕次郎著（昭和九年五月発刊）
 - ・黒石人物傳 発行 黒石市教育委員会 黒石人物傳編集委員会編（平成三年三月発刊）
 - ・青森県百科事典 発行所 東奥日報社（昭和五十九年発刊）
 - ・津軽黒石藩史 発行 株式会社歴史図書社 森 林助編
 - ・黒石市史通史編Ⅰ 発行 黒石市（昭和六十二年十一月発刊）
- 四 黒石城と黒石陣屋
 - ・旧黒石城址 佐々木要七郎著（平成八年四月発刊）
 - ・黒石市史 通史編Ⅰ 発行 黒石市（昭和六十二年十一月発刊）
 - ・まんが伝の城物語下 発行 陸奥新報社 知坂 元著（平成八年七月発刊）
 - ・黒石市史略年表 発行 黒石市 黒石市教育委員会文化課編（昭和五十九年八月発刊）
 - ・黒石市近代史年表 黒石文化史懇談会編（昭和五十四年十二月発刊）
 - ・黒石小学校百年史 発行 黒石小学校百年史記念協賛会（昭和四十八年八月発刊）
 - ・黒石風土記 北黒石の巻 佐藤雨山著（昭和三十二年発刊）
- 五 江戸時代の黒石
 - ・津軽史辞典 弘前大学国史研究会編（昭和五十二年八月発刊）
 - ・日本史辞典 高柳光寿・竹内理三編（昭和四十三年一月発刊）
 - ・日本の民俗 「青森」 発行 第一法規出版株式会社 森山泰太郎著（昭和四十七年八月発刊）

- 青森県百科事典 発行 東奥日報社（昭和五十六年三月発刊）

津軽の農書 三十六集 発行 青森県文化財保護協会（平成五年三月発刊）

青森県叢（双）書 「東遊諸家紀行集」 発行 青森県立図書館

平山日記—みちのく双書二十二集 発行 青森県文化財保護協会（昭和五十四年八月発刊）

津軽藩政時代における生活と宗教 発行 津軽書房 小館衷三著（昭和四十八年十月発刊）

管江真澄全集 内田 武志・宮本常一編 未来社（昭和四十七年発刊）

六 明治・大正時代の黒石 ◇ 七 昭和時代の黒石

黒石百年史 発行 黒石市役所 嘴海静蔵著（昭和三十七年五月発刊）

ふるさとのあゆみ黒石 発行 高橋影一・津軽書房 山上笙介編（昭和五十六年三月発刊）

黒石小学校百年史 発行 黒石小学校百年史記念協賛会（昭和四十八年八月発刊）

新ひょうたんなまづ 発行 福士一郎・株式会社みなみ新報社 甘茶勘平著（昭和三十三年六月発刊）

黒石人物傳 発行 黒石市教育委員会 黒石人物傳編集委員会編（平成三年三月発刊）

新津軽風土記わがふるさと（第三巻） 発行 北方新社 船水 清著（昭和五十五年十二月発刊）

黒石市史通史編 I 発行 黒石市（昭和六十二年十一月発刊）

黒石市史通史編 II 発行 黒石市（昭和六十三年十二月発刊）

黒石市史資料編 I 発行 黒石市（昭和六十三年九月発刊）

黒石市史略年表 発行 黒石市 黒石市教育委員会文化課編（昭和五十九年八月発刊）

日本史用語大辞典 発行 柏書房株式会社（昭和五十三年八月発刊）

国語大辞典 発行 株式会社小学館 尚学図書編（昭和五十七年二月発刊）

八 黒石市の誕生

第六回黒石市の統計 黒石市企画商工部調整課編（平成十年版）

黒石市史通史編 II 発行 黒石市（昭和六十三年十二月発刊）

黒石百年史 発行 黒石市役所 嘴海静蔵著（昭和三十七年五月発刊）

ふるさとのあゆみ黒石 発行 高橋影一・津軽書房 山上笙介編（昭和五十六年三月発刊）

九 町名が語るもの

青森地名双書①津軽地名の語源 発行 あすなろ舎 杉田弘州著（昭和五十九年十月発刊）

あとがき

表紙は、佐藤義弘氏の題字と、黒石の町なみのようすが、ありありと浮かんでくるように描かれている須藤重昭さんの絵で構成しました。

「黒石のむかし」の内容は、黒石地域の「縄文時代から昭和時代」までといふ、「黒石の生い立ち」になっています。大変長い期間のできごとになり、いろいろな事がたくさんあるわけです。でも、ごく限られたスペース内におさめる、という書き方が必要であつたため、全てのことを紹介することはできませんでした。それで、今回は、「主なことがらを短く分かりやすく述べる」という書き方にしました。

ですから、述べている内容について、「もつとくわしく知りたい。」とか、「こここのところは、どうなんだろう。」とか、「黒石の、こんなことについて知りたい。」などと感じるところも出てくる場合があることと思います。そんなときには、黒石市民財団あてにお手紙をください。できる限り皆さんのお役に立ちたいと思っています。また、ご連絡の内容によつては、それらのことを、次に作つていくときの大事な観点として生かしていき、皆さんのがさらに活用てきて、より親しんでくれる冊子にしていきたいと願っています。

みなさんには、できるだけわかりやすく書くことに努めましたが、それでも、「むかし」のことを説明する言葉やことがらについては、現在見られないものとか、使われていらないものなどがたくさんありました。そこで、その主なものに注釈をつけました。その章の最後の部分に載せておりますので、本文を読むときに参考にしてください。それでも、まだはつきりしないことがありますたら、自分で辞典を開いて調べてみてください。

「黒石のむかし」を読んだ皆さんの中に、「こんなことがあつたのか。」とか、「そうであつたんだなあ。」とか、新しい発見や学習してきたことの確かめなどがあつてほしいと思っています。また、マップを見ながら「たずね歩き」、本文に書かれていることがらやそれに関係する状況を実際に自分自身で知る、という活動がなされることも期待しています。

日ごろ、多くの市民の方々が、市民財団の活動や募金にとてもご協力くださっています。今回、子どもたちのために第一回目の発刊ができましたことを、その方々一人ひとりに、心から感謝申し上げます。

平成十一年三月十七日

わたしたちの黒石（第一集 黒石のむかし）

平成十一年三月十七日 第一刷発行
編集委員（五十音順） 佐藤義弘 慎

三對高白佐工藤一郎
馬木戸順英省次司

発行者

財団法人 黒石市民財團

佐藤義弘

発行所

青森県黒石市大字市ノ町五番地二号

財団法人 黒石市民財團

電話 ○一七二(五三)三七七七

印刷所

株式会社

津軽新報社

青森県黒石市前町四十八番地

電話 ○一七二(五二)三一九一